

日本記者クラブ会報

東京都千代田区内幸町二丁目一
日本プレスセンタービル
◎社団法人 日本記者クラブ
電話 〇三三三五〇二七二二

一九九一年一月二十三日 記者会見

「軍産複合体」と戦おう



ビタリー・コロティッチ
『アガニョーク』誌編集長

私は、ソ連最大の週刊雑誌『アガニョーク』の編集長をしておりますとともに、人民代議員大会の代議員でもあります。後で、皆さんから質問を受け、それに答えることを楽しみにしています。

わが国でいま進んでいるプロセスには、非常に深刻なものがあり、また中に不可能なものもあります。

私は昨日冗談として、水族館と魚のスープとを比較してみたら、という話をいたしました。それは、水族館で泳いでいる魚を料理し

てスープはできるけれども、わが国がやろうとしていることは、魚のスープから水族館の生きた魚をつくろうとしているようなものだと。これは決して容易なことではありません。けれども五年前から、わが国の社会を再活性化しよう、生き返らせよう、というプロセスが始まりました。

その過程で、昔からの問題が再び息を吹き返してきました。願いや恐怖などいろいろなもの、われわれの社会の骨組みを構成していたわけです。この社会からそういう昔の骨

組みを取り除いてしまうと、社会を一つにまとめることが難しくなるわけです。

われわれは経済を変え、生活を変え、そして人間らしくなろうと試みてきたわけです。なぜなら、長年にわたってわれわれは、人間的なカテゴリーからは分離されてきたからです。わが国では私的な財産を持つことができます。また、政党も依然一つしかありません。そのような条件下でデモクラシーを打ち立てることは、決してたやすいことではありません。

巨大になった軍産複合体

中でも、一つの大きな問題となったのが、軍産複合体です。われわれは、多くの敵が周りにいる、と教えられてきました。すなわち、ヒーローはすべてわが国の中にいて、敵が周りにいるんだと。そういう中で、軍産複合体は、手が付けられないほど巨大なものになりました。

目次

「軍産複合体」と戦おう

ビタリー・コロティッチ

『アガニョーク』誌編集長

経済復興に日本の支援を

ビオレタ・パリオス・デ・チャモロ

ニカラグア大統領

10

1

そして、今や四百万人の軍隊を持つにいたっています。今やわが国の予算の半分以上を、軍及び軍関連のために支出しています。経済を立て直すことができない国でありながら、引き続き巨大な軍産複合体を食わせているわけです。

昨日、韓国に対して、わが国の兵器を買ってくれないかという話が持ち出された、というのを聞きました。北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）もわが国の兵器を持っているわけですから、これはなかなか面白い話だと思います。

いまイラクでソ連製のミサイルが何をやっているかを、皆さんは目の当たりにしておられるわけです。今回の湾岸戦争は、アメリカにとってはあたかもパトリオット・ミサイルの広告のように見えるし、イラクのやっていることはソ連兵器の宣伝のようです。

われわれは軍事予算を削減したいのです。でも、われわれの將軍達は、それはあまりうれしくないと思っているわけです。ゴルバチョフは東欧の問題解決に手を貸して、その結果、わが国の軍隊関係者が、東欧から帰国してきています。

わが国の前外相・シェワルナゼ氏に対する軍の攻撃がいかに激しかったかは、皆さんがご覧になった通りです。ついにシェワルナゼ

氏は辞任しました。でも、これは手始めにすぎません。軍産複合体はますます強大になっています。まるでアメリカの映画『スターウォーズ』第二部の『帝国の逆襲』を見ているようだ、と私は冗談を言っています。

敵を探している軍隊

わが国の軍隊は敵を探しています。サダム・フセインのような格好の敵がいらないからです。そこで、わが国の中に敵を探し始めたのです。軍が警察の代わりに使われ始めています。バルト諸国でどんな事件が起き、だれがだれを殺したかを知らないなどと、大統領や国防相が言っているのは、まことに危険なことですよ。

わが国では、まだ市場経済をつくれません。マーケットを持つ代わりに、われわれは巨大な軍と官僚機構を持ってしまっているのです。わが国における変化は、構造的な変化でなければなりません。決してたやすい改革ではないでしょう。けれども、変革は起きつつあります。

ところが、わが国におけるリベラルな変革が、現在、激しい攻撃の対象になっています。すっかりしていたプレスは、今や考えられないような形で攻撃されています。刊行物の値段もこの間までより二、三倍高くなっています。政府は民主主義を志向する読者をカットアウトしています。テレビも巨大なメディア

になりましたが、最近、テレビ・ラジオ放送国家委員会の長が代わって、その結果、テレビは最も保守的な情報源となっています。

このような条件下で、われわれは外国の動静、あるいは国際的な世論から隔てられようとしています。もし、われわれが国際世論から全く隔離されてしまったなら、われわれの動きを止めることはできるでしょう。したがって、われわれにとっては、世界の人々と常に一緒に手を携えていくことが重要なことです。

私はソ日関係が良くないことを知っております。しかし、わが国の多くの人々は、関係が良くなることを夢みています。現在、日本の外相がモスクワを訪問していることは、極めて大事なことだと思います。四月にはゴルバチョフが訪日を予定しています。

昔から、一つのソビエト連邦と、もう一つのソビエト連邦が存在してきました。すなわち、変わろうとするソ連——外国からの支援を求めるソ連——と、外国からの断絶を願うソ連、その二つが存在してきました。そして、この民主主義を志向するソビエト連邦が、ますます強くなってきました。

いまバルト諸国で起きている出来事は、全体の中の一つの滴にすぎません。自由のための戦いは、いろいろな所で行われています。このような戦いが、ペルシャ湾岸、バルト諸

国、他の地域でも起きていることは肝要なこととです。

民主主義の子供を産む

われわれは国内の諸問題を平和的に解決するために戦っているのです。それを弾圧し、血と報酬を求める組織がわが国の中に存在することは、容認できません。民主化を後退させよう、押し戻そうとするような力は止めなければなりません。

実際、それはできると思います。われわれは民主化に向かってのプロセスをかなり歩んできましたから。半分妊娠している。などというのとは不可能なのです。ですから、われわれは、民主主義の子供を産むはずで、ただ当初思っていたほど簡単ではないだけです。

私は、ジャーナリストが情報探しをやらない国から来た人間です。われわれはインフォメーションを与えられてきました。そしていま、われわれは初めて情報を自らの手で探し始めています。

始めに、皆さんからの質問に答えることを楽しみにしている、と申し上げましたのはなぜでしょうか。皆さんが最も経験のある、最も進んだ国のジャーナリストでいらっしゃるからです。私の知っていることは、喜んで何でも申し上げます。

質疑応答

武山（日経OB） モスクワで反ゴルバチョフのデモが数日前に行われた。その時エリツインの補佐官は、身が危ういからエリツインは出ない、と言った。

先週末にワシントンのソビエト専門家から得たインフォメーションでは、ソビエトにおける反動勢力がエリツインを逮捕するか、突如、彼を事故で死んだというふうに見せようとするだろう、と聞いた。その点についてはどうか。

それに関連して、なぜソビエトでは、あなたが言ったようなリベラルな人の結果が行われないのか。

コロティッチ エリツインは、暗殺されるかもしれない、と言っております。でも、エリツインは、ゴルバチョフの競争相手ではありません。奇妙な形でこの二人はつながっています。ゴルバチョフがエリツインを生み出したのです。ゴルバチョフは小さな蠅から象をつくり、その後で象牙を売り出したのです。

ゴルバチョフは時にカーターのようにみえます。とても正直で、人類を自分自身で救おうとしているようにみえます。エリツインは、むしろレーガンのようにみえます。普通の人

ですけれども、とてもいいスタッフを持っていて。このスタッフはゴルバチョフが組織したものです。ゴルバチョフが押し出した人々が、エリツインの周りにいるわけです。

別の政党、別の指導者をつくり出すことは、わが国では容易ではありません。政党は一つ、共産党だけです。他の政党はまだ集会の段階にすぎません。政党というのは、綱領、予算、通信手段、事務局を持つ、しっかりとした組織です。

独裁体制に対抗してリベラルムーブメントをつくらうという動きが、モスクワにはあります。この試みは一月の初めにはかなり強かったのです。これが二月の初めにすっかりした形で姿を現すことは可能だと思います。

このような運動の中にシェワルナゼからヤコブレフまで、左派の急進派の人達が民主主義という概念のもとに結集することが大切だと思います。ちょっと遅すぎるといふ懸念を私は持っています。わが国ではだいたい電車がでてから物を考えるというくらいがありません。

今や軍産複合体は、その拳を強くふりあげ始めています。でも、われわれは独裁体制を望んでいません。わが国の政治のボキャブラリーの中では政敵という言葉と、反対勢力という言葉は同意語です。ゴルバチョフは今ま

で、反対勢力と自ら称する人を政敵と考えてきました。

しかし、合法的でデモクラシーに対して忠実な反対勢力を、ゴルバチョフは必要としている、と思います。なぜなら常にゴルバチョフは左派を切ってきたからです。左を切ることは、左側の翼が短くなっているわけですから、ゴルバチョフが真ん中を飛ぶためには、もっと右も切らなければいけないわけです。

民主勢力は以前からありましたけれども、わが国では組織としては存在していませんでした。一方、保守派はリーダーがいなくても、ほこりの固まりのような形で集まっていたわけです。私はリベラルな人達、改革派の人達が集まる必要があると思っていますし、それを期待しています。けれども、可能かどうかは定かではありません。

議会の中で、地域間グループというものがあります。でも、これは政党ではなくて、改革派、リベラル派の人達の中でのいろいろな話をしているだけです。われわれには政治的なカルチャーが必要なのです。これから一年、リベラルな動きが強くなることを期待しています。

わが国では集会を開くことは簡単です。一週間あれば、私は二十万人の集会を企画することができます。しかし、何かをリードする

ための恒久的な十人の委員会を構成するのは容易ではありません。

西岡（東京） 最近のゴルバチョフの言動を見ていますと、ひとところとは全く人が変わったようにみえる。つまり、ブレジネフに近くなってきている。これは、彼自身が変質したのか、それとも軍産複合体の中に取り込まれて、心ならずもそうしているのか。どちらとお考えになっていいのか。

もう一つ。西側諸国では、ゴルバチョフは最近悪くなってきたけれども、彼に代わる指導者がいない、だから彼を支持する以外ない、と言われていますが、これは事実でしょうか。ゴルバチョフに代わる指導者、例えばエリツインとかヤコブレフ、そういう人達はソ連を率いていくことができるのか。

コロティッチ 私は、三年前にゴルバチョフに尋ねました。「あなたはペレストロイカに踏み切ったことによって、何十万人、何百万人の人達に、生活を変えろと言ったんですよ。もしペレストロイカが失敗したら、あなたは国民に対してどう説明するんですか。あなたの決定によって、みんなの生活が破壊されたことをどう説明するんですか。非常に不幸せな生活になったときに責任はどうやって取るんですか」と尋ねました。彼は「これは

僕の人生にとっても最後で一回きりのペレストロイカだ」と答えました。それで私は彼を信じたのです。

いま、ゴルバチョフは人質になってしまっている、と思います。二、三回、軍のグループがゴルバチョフをとがめているという議会の資料をもらいました。ゴルバチョフは常にきつい攻撃を受けています。今やその攻撃は左からも右からもきています。まるでアジエンデとピノチエトの二役を引き受けさせられているように見えます。容易なことではないのですが、ゴルバチョフは、左右のバランスをとろうとしています。

この前の人民代議員大会で、五十三人の將軍やリーダーといわれる人達が戒厳令を出すように、というアピールに連署して、彼に送りつけました。ゴルバチョフは流血を招かずにバランスをとろうとしました。今や、事態はますます血生臭くなって、それをバルト諸国で目の当たりにしているわけです。

われわれは他のリーダーを持ち得ていません。政党が一つしかない国で、代わりの指導者を生み出すことは不可能です。ゴルバチョフが官僚機構に対してやったことを、官僚達は決して許さないでしょう。しかし、ましな人がいないわけですから、多分ゴルバチョフが一番ましだということでしょう。

その場合でも、自由選挙がなければいけません。ゴルバチョフは自由選挙で選出されたわけではなく、人民代議員大会で選出されたのです。エリツインはゴルバチョフの地位に自らを擬したことはありません。エリツインはあくまでも知事というか、ロシア共和国の長であり、ソビエト連邦全体のリーダーになるうとしたことはありません。

いま仮にゴルバチョフが辞めたら、代わりにリーダーとして登場するのは非常に保守的な人でしょう。エリツインは、今年ロシア共和国で選挙を実施して、ロシア共和国の大統領になるうとしています。

私は、ソビエト連邦でも、大統領選挙が必要だと思いません。そういう選挙がやれてこそ、次の指導者についての話ができると思いますが、それは時間的にもう少し先でしょう。

いま、ゴルバチョフはひどい状況に追い込まれています。例えば、リトアニアのビリニユスで流血の惨事が起き、人が死んだときに、ゴルバチョフは、「私は知らなかった。新聞で初めて知った」と言いました。国防相も同じことを言いました。大佐が国を支配するようになったら非常に危険です。

ゴルバチョフは自分が大統領であり、強力な指導者であることを示さなければいけません。ゴルバチョフは十分に経験も積んでいる

し、頭のいい政治家です。政治的にいかにバランスをとって生き残ったらいかということとを、多くの時点において示してきました。

保守派の人達が力を握ることのないように、保守派の人達から力を奪うように状況を変えるべく、ゴルバチョフはきつと何かするだろうと信じています。もしそうでなければ、わが国にとっても世界全体にとっても、危険なことになるでしょう。

高山（朝日） 三月十七日にソ連の連邦制を維持するかをめぐる国民投票が予定されています。いまの状況で投票が実際に行われるかどうか。すでにいくつかの共和国は参加しないと聞いていますが。

コロティッチ 国民投票はまず発表されなければいけないわけで、それ自体にかなりの問題があります。グルジア共和国やバルト諸国のように、ソビエト連邦の一部だと思っていない所があるわけです。そういう所は国民投票に参加したくないと言っているわけです。エリツインは四つの共和国の連邦で十分じゃないか、と言っております。私は、国民投票は行われて、共和国単位で集計が行われると思います。

奇妙なことに、向こう四、五年間、ソビエトの各共和国は別々では経済的にやっていけ

ないという事情があります。共和国はそれぞれ独立したいと思っていて、かつ、共和国同士協力しなければいけないということを理解しています。

昔のアメリカ映画のように、黒人と白人が監獄から脱出しているような状況です。鎖で結束されているようなものです。お互い大嫌い、でも鎖でつながれているから一緒に走らないと脱出できない。もし、相手を殺したら自分も死ぬはめになる。だから、わが国の共和国はみんな一緒になって独立を目指す。独立のための戦いはもっと強くならなければなりません。

われわれには、養ってくれる人、引き受けてくれる人がいないわけです。日本が里親になって養ってくれるのであればその方がいいのですけれども（笑い）。このような奇妙な協力には東欧との間でも同じです。西ヨーロッパのような発展段階に到達するまでは、東欧ともまた協力しなければいけない。

ゴルバチョフが使っているテーブルは、スターリン、フルシチョフ、ブレジネフが使ってきたしっかりしたテーブルです。そこにたまってある請求書をゴルバチョフは全部払わなければいけないわけです。ですから、四月にゴルバチョフが訪日する時には、昔のスタ

ーリンの請求書まで払って下さい、ということとを求められるわけです。

国民投票は行われるでしょう。そして、投票結果によって決定されるでしょう。連邦制度が続くとして、一体どういう連邦になるのかは分かりません。わが国の将来の国名についても話し合われているのです。

饗庭（NHK） ヨーロッパの軍縮に当たって、軍部がシエワルナゼ外相に秘密で戦車などを隠した、という話がありました。湾岸戦争に関して軍部がゴルバチョフ政権の意に反して、違ったことをやっている可能性があるかと思われませんか。

コロティッチ 軍産複合体はどこかでつながっていて、お互いにお互いが必要とします。そして彼らが生き残っていくためには常に危険な状態を必要としています。

フルシチョフとアイゼンハワーの会談が六〇年代に予定された時、アメリカのU2型偵察機がソ連の領空を侵犯して、撃墜されてしまい、その結果、会談が吹っ飛んだ、ということを思い出します。

数年前、大韓航空機がソ連の領空の中に入ってきて、ソ連がそれを撃ち落とし、それによって冷戦状態がそれだけ長く続いたということもありました。また、レーガンがモスク

ワを訪問する十日前に、アメリカの巡洋艦がソ連の南部のクリミア海岸の近くに現れる、ということもありました。

そういうことが起これば、三、四年くらい軍産複合体は生き延びられるじゃないかと、將軍達は恐ろしい結果を誇っています。いまドイツでは、ソ連やアメリカの將軍達がドイツにずっといたいのに、いやいや帰国しなければならぬので、不満な顔をしています。軍産複合体は、すべての人にとって大きな危険だと思えます。

現在世界には、二つのパワーがあります。一つは、ソ連やアメリカに代表される軍事力。もう一つは、日本やドイツに代表される経済力です。私は、日本のやり方の方がベターだと思います。

ソーセージやパンやバターが足りないのに、必要以上の数のミサイルがわが国にはあります。それは、われわれは軍産複合体に対して戦わなければなりません。戦車をつくっていた工場をトラクターをつくる工場に変えることはできます。しかし、ミサイルについては壊してしまうこと以外に手が無いわけです。しかもそれは一基何百万もするのです。

軍産複合体は、自らの命を人質にしています。生き延びるためにはそれをやっていかな

ければならないわけです。気の毒なゴルバチョフは、ゴルバチョフよりも強い人々の人質になっています。これは、システムが生み出したものであり、同時にゴルバチョフはシステムの犠牲になっているわけです。

広淵（テレビ朝日） あなたはいま随分思いついたことを話したが、その結果が将来、あなたの政治生命にかなりの危険を及ぼすのではないかと、同じジャーナリストとして心配しているのですが。

コロティッチ 私は、東京の大使館の関係者とすでに会合をもちました。大変興味深い会合でした。かなりの人達がハードライナーでした。しかし中には、一体何が起きているのか本当に知りたい、変革を手助けしたい、という人もいました。

外交官は、時に頭の中で考えていることを、そのまま口に出さないことがあります。ジャーナリストは、口にあることを頭の中で考えていないこともあります（笑い）。私が存在し得ているのは、自分が表現したものの基盤に立っていることです。ジャーナリストは、自由が生み出した真実をメディアに投影しているのです。自分の国のことや自分の考え方をよく知らないで、自国と自分の政治理念にとって都合のよい事ばかり言って暮らそうと

いうのは、不可能なことです。

大使館の人達と会ったときに、あるハードライナーが、「あなたは一体だれのためにやっているのか」と聞きました。私は、「憲法と刑法を分かった上でやっているんだ」と答えました。私は、自分の机の上にある電話(指令の意)ではなく、憲法に依拠したい。わが国での戦いというのは、普通の人として生きられるようにしたい、ということですよ。ジャーナリストはみんな、自分自身でありたいといつも夢見ているのです。自分が正しいと思っていることを書きたいのです。

私は最初、外科医の教育を受けました。私の両親は、「実業に就かなければいけない」と言っていました。「ジャーナリストになっちゃったら、自分よりも高い地位の人に頼ることになる」と両親は言いました。「外科医になったら自分の腕で身を立てることができるじゃないか」と。私は、外科医を六年しかやりませんでした。私は職業を変えてジャーナリストになりました。正しい選択だったと思っています。

毎日、毎日、真実がわれわれの心の中で印刷され、それによっていつか社会が内部から吹き上げるのです。それぞれの人が自分の中に天安門を抱えているのです。そして、自国の人々と接触を保とうと試みることで、ジャ

ーナリストははじめて幸福を知るのです。

私は、人民代議員大会の代議員に奇妙な形でなりました。一度も行ったことのない、人口二百万の都市が、私を代議員に推したので、候補者は十二人いました。第一回投票で、私は八四%の票を集めました。東京の帰りにその都市に寄ることにしています。そこに行きましたら、東京で嘘を言ってきたのか、それとも本当のことを言ってきたのか、と聞かれるでしょう。

時には真実を言うことが役に立ちます。私はアメリカに行ったときに、私を選んでくれた都市には戦車を生産している工場が十か所ある、と言いました。それは秘密だったので。人々はその戦車工場を閉鎖して、トラックを生産しようとしていたのです。今やこの戦車工場はトラック工場に変身しています。

こういうふうにものを言おうとする時、いつも私の心の中には小さなスターリンがうずくまっています。「もうこのへんで止めておけ」と言います(笑)。しかし、これが私の経験であって、人生なのです。時にはわれわれはもっと強くならなければならぬ。なぜならば、われわれの後ろには子供達があり、子供達に幸せでないことを強いるようなことがあってはいけぬのだから。

私の人生につきまとうて離れない記憶は、父のことです。父は自分の生きたいように生きられなかった。同僚に本心を打ち明けることを恐れていた父は、家でそれを私に言っていました。父は非常に不幸せな人でした。私は父よりも幸せになりたいと思つたし、いま、はるかに幸せです。皆さんと一緒にいることができて……。

荒田(朝日) 先ほど、ゴルバチョフ大統領が左右の批判の中でバランスをとろうとしていると言った。それはよく分かるんですけども、ゴルバチョフ政権の性格は、例えば一年前とか二年前と比べて変質しているのかどうか。右の方に変質していると言われたけれども、それは正しいのか、間違った解釈なのか。

それからゴルバチョフ大統領の周辺にいた人達が、次々と引退したり、引退を噂されています。ゴルバチョフチームといわれた人達は、いまだどうなっていましたか、解散するのかどうか。

コロティッチ ゴルバチョフの周りには随分、前とは違った顔触れの人があります。古い体質の官僚達がゴルバチョフの周りにいます。昨年までは諮問会議として大統領評議会があった、そこにはしっかりした人達がいきました。

ところが大統領評議会はすでになくなってしまいました。

ゴルバチョフチームの中で最も急進的だったのはヤコブレフだと、私は思っています。私はヤコブレフに、「あなたは大統領評議会のメンバーだったが、いまはどこにいるの」と聞きました。彼は「大統領評議会は廃止されてしまったけれども、私はいまも元の部屋に座っている。私はいまも諮問委員会のメンバーとして仕事をしている」と答えました。

現在、わが国にはいろいろなグループのリーダーがいます。まだ、急進派グループのリーダーもトップのどこかに残っています。保守派もいます。今や、新しいゴルバチョフ体制が生まれ始めており、その周りには保守派が取り巻くようになっていきます。

いま、本当に何が起きているかを私も知りたいと思います。ゴルバチョフが従来のやり方を変えるには、ちょっと遠くへ来すぎた、と私は思っています。彼が右派の人達のところに行って、「私はあなた達の仲間だ」と言ってもだれも信じないでしょう。この五年間、右派の人達にとってはひどい思いをした時期があったわけで、そのときに味わった恐怖の日々を右派の人達は忘れないでしょう。

もう少し待とうではありませんか。静観しようではありませんか。私も含めて、いろ

ろな人達を逮捕することはできません。でも、プロセスを変えることは不可能です。わが国の人々は人間らしく共に生きたいと言っているのです。

われわれはかつての敵というイメージを壊してしまっただけです。アフロメーエフ元帥が私の雑誌に、「日本やドイツのあるグループが、わが国を攻撃しようとしている。だからわれわれは強力な軍隊をもたなければならぬ」と書いたときに、そういう考え方に反対する抗議の投書を私はたくさん受け取りました。すなわち、わが国の人々は、日本もドイツも友好国だと思っているわけです。われわれの世論調査では、八六%の人々がアメリカを最も友好的な国だと回答しています。わが国の人々は現実的になって、友好的に生きてい、普通の生活をした、と思うようになっていきます。

ゴルバチョフが路線を変えようとしても、わが国の人々がそれを許さないでしょう。ひょっとして私は自分の国の人々を実態以上によく見ようとしているのかもしれないが、人々は自分達が願っているリーダーを持ちたいと思うものです。リベラルなリーダーを持つ用意が整っていると思います。

中村（神奈川） ソビエトの方から「軍産

複合体」ということを聞いたのは初めてです。ロシア語にもそういう言葉があるのか。私達によく理解させようと思っただけですが、イメージがわいてきません。内容をもう少し説明していただきたい。

コロティッチ わが国では五百万人の熟練した労働者、エンジニアが兵器をつくっています。イラクや北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）、あるいはアフリカの兵士達が持っているカラシニコフのサブマシンガンはほとんどがソ連製です。中国製のものも少しありますけれども。戦車とかミサイルとか爆撃機の話をもう一度繰り返すことは止めたいと思います。恐ろしい話ですから。

そういう兵器を生産するためにはしっかりとした産業が必要です。そして、兵器を必要とする人達がいなければ困るわけです。ということとはわが国に軍隊が必要であり、そしてわれわれの周りに軍事力を必要とする情勢が必要なのわけです。

わが国には多くの将軍がいます。裏付けされた事実ではありませんけれども、モスクワだけでも、アメリカにいるよりもたくさん将軍がいる、と言われています。それぞれの将軍が戦車も、兵隊も、機関銃も、兵器をつくる工場も必要なわけです。

武器をつくる側の人と、武器を使って軍隊を支配する人が複合体をつくるわけです。彼らは、考えられないほどいい給料をもらっています。お金を計算したことがなかったから、かつて軍事用のナイフをつくっていた工場で、食事用のナイフをつくったところ、一本百五十ドルもかかったという話があります。いま、わが国の工場では軍用の飛行機をつくっています。ということはそういう飛行機を売る、相手の軍隊が必要なわけです。軍用機を買ってくれる外国の政権が必要なわけで、そうすれば、彼らは満足のいく生活が送れるわけです。

ところが、一方でわが国ではテレビの受像機も自動車も自転車も十分にはないわけです。ミサイルとごく普通の商品との値段を比較しようなどとは思いません。でも、軍産複合体の人達は武器をつくらなければ生き残れないのです。彼らが機関銃をつくらなくなったら何をつくるんでしょうか。おもちゃでしょうか。そうなると、政治的な立場も変わってくるし、入ってくるお金もガラリと変わるでしょう。

このような状況を乗り超えて、平和的な目的のために軍産複合体を使いたいと、私はなぜ考えるのでしょうか。ここにはすばらしいエンジニアとすばらしい労働者がいます。こ

の人達は国のために役に立つことができると思っているわけです。この人達をうまくコントロールしていかねければなりません。そして、戦車一台一台、ミサイル一機一機、よく予算の中で検討すべきです。併せてソ連の将軍達もきちっとコントロールしたいと思っております。なぜならば、将軍達が憲法よりも強いと、バルト諸国のような出来事が起きるからです。

(通訳 福島安紀子 文責 編集部)

ビタリー・コロティッチ氏 一九三六年生まれ。キエフ医科大学卒。八六年から『アガニョーク』誌編集長。八七年ゴルバチョフ訪米に随行。八八年には訪日し、安倍幹事長(当時)らと会談。ソ連・急進改革派の旗手として知られ、「フルシチョフの陰謀」「杉本良吉は銃殺されていた」などのスクープがある。

■一九九一年二月十三日 記者会見

経済復興に日本の支援を



ビオレタ・バリオス・デ・チャモロ
ニカラグア大統領

(司会・藤村副理事長のゲスト紹介)

本日は、ニカラグアのビオレタ・バリオス・デ・チャモロ大統領をお招きしました。皆さんご存じの通り、チャモロ大統領は、おとし自由と民主主義を唱え、サンディニスタ政権に対抗する「国民党連合」(UNO)の大統領候補として指名を受け、昨年二月当初の予想を覆して大勝し、大統領に当選されました。明日、離日されますが、帰国されると、大統領当選一年のお祝いがある、ということでございます。

簡単にチャモロ大統領の略歴をご紹介します。まず、一九四七年、アメリカのバージニア州ブラックストン・カレッジを卒業されて、五〇年、「ラ・プレンサ」社主のペドロ・ホ

アキン・チャモロ氏と結婚されました。

ところがご主人は、四十二年間続いたソモサ政権を批判したため、七八年一月暗殺されました。この暗殺を機会に反ソモサ運動が大変高まり、七九年六月、サンディニスタ民族解放戦線(FSLN)が臨時革命政府を樹立しました。

二男二女の主婦であったビオレタさんは、ご主人が暗殺された後、「ラ・プレンサ」の経営を引き継いだのですが、七九年七月にサンディニスタ政権からの要請を受けて、国家再建執政委員会の委員に就任しました。しかし、サンディニスタ政権が次第に左傾化するのに反対し、わずか九か月で同委員を辞任しました。

その後、八一年三月、FSLNのダニエル・オルテガ氏が国家再建執政委員会の議長に就任、その後オルテガ議長は八四年十一月、革命後初の大統領に当選しましたが、この間「ラ・プレンサ」はサンディニスタ政権に対する大変鋭い批判を続けたために、頻繁に検閲、発行停止などの妨害が加えられました。

チャモロ夫人は弾圧に屈することなく、「ラ・プレンサ」を維持し、反サンディニスタ政権の論陣を張ったため、ある種の反サンディニスタ政権のシンボリックな存在として、対外的にも国内的にも活躍することになったわけです。

そして、八九年九月、十四の政党を結集したUNOの大統領候補に推薦され、昨年の二月に先程申し上げた通り予想外の大勝となったわけです。

会見前に伺ったのですが、自由と民主主義を守るというご主人の遺志だけが自分を支えている、と言っておられました。

きょうはあまり時間がございません。まずチャモロ大統領から皆さんへメッセージをいただき、その後質問に答えていただくことにしたいと思います。

◇

◇

ここに集まりのすべてのマスコミ関係者の方々に心からごあいさつを送ります。私は、きょう東京にいることをとても喜んでおります。まるで私は自分の家にいるような感じを持っております。

私は、日本人は非常にやさしい心を持ち、国際的な問題をいかにして解決するか、そのためにどういう貢献をするか、と常に心掛けている民族だと思っております。

昨年二月、わが国建国後初めてといえる公正な選挙が行われました。そして、その際日本政府が私どもに支援してくださったこと、国連やその他の国際機関を通じて、日本政府が私どもに寄せてくださった経済的な協力に對して、私どもは常に感謝の気持ちをもっております。

このような日本をはじめとした友邦国の支援によって、わが国では表現の自由、複数政党制、基本的人権といったものを勝ち取ることでできました。ニカラグア国民の希求した、平和と和解と民主主義と自由を手に入れたわけです。

おとしの九月、ニカラグアの十四の野党が、この野党の勢力を代表する大統領候補として、この私を選ぶことになりました。そして私は、その大統領候補の要請を、祖国に對する強い愛情でこたえようと決意いたしました。

私がニカラグアに對して持っている愛情、すべてのニカラグアの人々に持っている愛情、こういったことから大統領候補を引き受けました。

成果は武装解除、軍隊の削減

そして昨年二月、私どもは大統領選挙に勝利したわけです。私どもがまず着手したのは、わが国の平和の確立であり、すべてのニカラグア人の和解の道を歩むことであります。その結果、私どもは九年の長きにわたる戦争に、ついに終止符を打ったわけです。

日本の方々には、戦争の廃墟から立ち上がるのがいかに困難であるかを、良く理解していただけたと思います。平和をつくりあげることが戦争を始めるよりも困難なことではないか、と思えます。しかしながら、私どもは過去一年の間に、ニカラグアの平和を達成することに成功いたしました。ニカラグアの抵抗運動の反乱者二万人の武装解除を達成することができたのです。

同様に、わが国の軍隊を削減することができました。八万人から九万人いた兵士の数が、今では二万八千人に減っております。そして昨年十月には、ニカラグアの様々なセクター、すなわち政府、組合、民間企業の間で、“社会経済合意”に達することができました。このプロセスを私どもは、“国民合意プロセス”

と呼んでおります。この合意こそがわが国の社会的な平和達成の基盤となるものである、と確信しております。

大統領就任後十一か月の間に、三権（行政、立法、司法）の独立も達成することができました。これこそが真の意味での民主主義を保障するものである、と思えます。しかしながら、私どもが勝ち得た平和や民主主義は、これから確固としたものに強化する必要があります。そのために私どもは先進諸国に對し、非常に多額な債務を抱えているわが国が敗戦の廃墟から立ち上げられるよう、特別な配慮、取り扱いを要請しております。

急務の対外債務問題

今回の私の訪日の目的もそこにあるわけです。私どもの政府は世界各国に對して、わが国の窮乏を訴え、経済支援の必要性を分かっていたいただきたいと思っております。私どもの国は、国際的な機関に對する支払いが非常に遅滞しておりますが、これを解決し、経済的に私どもの国が再びスタートを切れるよう協力を要請しています。

日本滞在中に、私どもは日本の指導者の方々と会談いたしました。そこで前向きな対応をしていただいたことを、非常に喜んでおります。海部首相は、三月にワシントンで行われる会議に出席し、ニカラグアを支援するこ

とを約束してくれました。またニカラグアが国際機関に対し支払いを遅滞している問題に對しても、支援を約束してくださいました。また、ニカラグアとの貿易の促進や都市環境を備えるための長期融資の支援も取り付けました。そのことによって今後両国間の貿易が活発になることを期待しております。

また、私どもは日本から千五百万USドルの経済協力、七百万ドルの無償金融協力、輸出保険の再開、さらに新規の二百万USドルの融資枠を取り付けることができました。それに加えて、わが国の教育・文化プログラムの強化のための文化協力も得ることができております。

私は、日本が私どもの要請に前向きに対応してくださいましたことを非常に感謝しておりますとともに、両国の友情が国際的な和解を確立する上でいろいろな成果を上げることが確信しております。私どもの政府は世界の共同体というものを目指しているわけです。

スピーチはこれくらいで終わりにして、これから質問を受けたいと思います。私は大統領になる前は、ご紹介にもありましたように「ラ・プレンサ」という新聞の社主をしておりましたので、記者の方々の仕事についてはよく存じ上げております。皆さま方はスピーチを聞くことにも関心がおありでしょうけれども、また様々な質問を持っていらっしゃると思います。皆さま方の質問は、いまわが政府が確立した完全なる自由という精神でおやりになってくださることを、私は非常に喜んでおります。

藤村 Ⅱ 先程会見前にゲストルームで記念の署名をしていただいたときに、チャモロ大統領はこうサインされました。

「ニカラグアではやっと一年前に報道の自由ができた。報道の自由の長い歴史のある日本に来て大変うれしい。日本記者クラブに招かれたことが大変うれしい。そして、できるだけたくさん質問をしてほしい。」

残念ながらあまり時間がありません。できるだけ簡潔に質問していただきたい、活発に質問していただきたいと思っております。

質 疑 応 答

伊高(共同) 政権を担当されてから十か月経つわけですけれども、一番の成果は何であったか。そして現在、ニカラグア政府が直面している最も深刻な問題は何か。その深刻な問題を解決するためにどのようなことをやるのか、などについてお聞きしたい。

チャモロ 大統領就任以来、私が最も望んでいたことは、わが国における戦いの終結ということですが、すなわちニカラグアにおける平和と和解、ニカラグア人同士がお互いに許し合う心の確立です。

そのためにあらゆる意味での恩赦が行われ、祖国を追われた人々が、今ニカラグアに帰ってきました。それは、私が大統領に選ばれた昨年(二月二十五日)から始まり、それが私どもの政権の最大の成果だといえると思っております。

現在私どもの政府が直面している最も深刻な問題は、わが国の経済危機をいかにして解決するかということです。

先程の成果の続きですけれども、スピーチの中でも申し上げたように、それは武装解除であり、武器の放棄であり、軍隊の削減です。

宮川(朝日) 二つ質問があります。一つはニカラグアの軍の問題です。今なおサンディニスタの影響力が非常に強いと言われていますが、軍隊を中立化させるために今後どのような方策をとられるのか。最終的には憲法の改正だと思いますが、在任中に憲法の改正ができるという見通しがおありになるのかどうか。

もう一つは経済の問題です。私自身はニカ

ラグアと日本の経済協力がうまくいけばいいと思っっている一人ですが、例えばソ連とか東ヨーロッパの経済復興のためにも日本の資金が必要だし、湾岸戦争の解決のためにも日本の資金が必要です。そうすると本来中南米に行くべき日本の資金が減ってしまうのではないかと心配を、大統領ご自身がお持ちなのか。あるいは楽観されているのか。その点を伺いたいと思います。

チャモロ 第一の質問についてですけれども、私どもの政府は、まず平和は国民の統一的な合意、和解という路線を進めてきました。そのためには軍隊、民間企業、労働者などすべてのセクターの合意と和解が必要であるということ、常にそういった政治の仕方をしておりません。

軍隊についてですけれども、スピーチの中でも申し上げたように、わが国の軍隊はあまりにも多過ぎ、また強大であることから、私は大統領就任以来、軍隊の縮小に取り組んできました。先程申し上げたように、八万人から九万人いた軍隊が、現在二万八千人に減っております。

しかしながら、軍隊から離れた兵士達を路頭に迷わせるわけにはいきません。このような兵士達のリロケーション（再配置）が必要

なわけです。彼らにも働く場を与えなくてはいけないということが、私どもの政府の大きな問題です。

同じことは、われわれが抵抗運動の活動家と言っているコントラの活動家についても言えます。彼らを戦列から離れさせ、そして社会的あるいは生産的な戦線に復帰させることが、同じ人間としてニカラグア国民として、必要なことです。

そこで私どもの政府は、兵士達に多少ではあります。耕地を与え、生産活動に従事させるような政策をとりました。例えばスペイン政府から五百万ドルの援助を受けたのですが、その援助で五千人の兵士達になにかのお金を与え、彼らが戦列から離れられるようにしたわけです。そういった方法で軍隊を縮小しております。

第二の質問はニカラグアの経済危機についてであります。私どもの国は本当のところ破産状態で、経済危機の真っ只中にあるわけですから。わが国の対外債務は百十億USドルであります。

しかしながら私は誠実な一人の人間として、この対外債務を受け入れ、ニカラグア国民の和解を基盤として、でき得る限り早く支払っていく所存です。

もちろん、湾岸戦争の影響もあります。け

れども湾岸戦争は、単にわが国のみに影響を与えるのではなく、全世界に影響を与える出来事です。

私は国連を支援し、支持しております。湾岸戦争がぼつ発しないように、私は一人のカトリック信者として、祈っております。その祈りも空しく戦争がぼつ発したわけですが、その後も、できるだけ早くこの戦争が終結し、そして対話により解決が図られるよう相変わらず祈っております。

私どもはよく分かっております。死というものに苦しみと嘆きと涙しかもたらさないということ。私どもは日本やアメリカあるいはドイツのような友邦国が、廃墟から立ち上がろうとする貧しいニカラグアの国民を救いあげてくれることに、大きな確信を持っておりません。私どもの問題は、今後四か月の間に少しずつ解決するであろう、というのが私ども政府の見通しです。

荒木（NHK） 以前、チャモロ大統領が中南米地域の平和創設についてお話になったのを聞きしたわけですが、この地域の非軍備化、あるいは平和化のプロセスが、今どのような状況にあるのか、それについての日本の協力をどのようにお考えなのか、お聞きしたいと思います。

チャモロ 私はニカラグアの大統領として、もちろんニカラグアの国内問題に常に心を砕いてきたわけです。これからも一層そういった問題について考えなくてはいけないと思います。

しかし、中南米地域の平和が、わが国の平和にも非常に大きな影響があるのも事実です。中南米のように小さな国家が集まっている地域においては、国家間の統合あるいは連合が、この地域の安定ひいてはわが国の安定と平和にとっても重要である、と考えております。

従って、大統領に就任以来、常にこうした中南米地域の国々の大統領との合意、あるいは協定、そしてそのためのコミュニケーションの強化を図ってきました。中南米のどこかの国で問題があった場合、私どもが即座に電話で話し合って解決していくという状況が、いま作り上げられております。

こういった問題に対する日本の協力、日本に何を期待するかということですが、私としては、中南米の国々の主権を重んじつつ、常に尊重していただけることが、日本の最大の協力だと思っております。

ニカラグアの同行記者 先程の質問に関連しますけれども、中南米の平和化については、サンサルバドルの問題もありました。この中

南米の平和化、あるいは軍備解体化に対して、日本の政府が何をしてくれるかについて、もう一度お聞きしたいと思います。

チャモロ サンサルバドルの反乱者にニカラグアの軍隊がミサイルを売った、つまりニカラグアからサンサルバドルにミサイルが出ていった、という大きな問題があったわけです。そしてこのサンサルバドルの反乱者には、メキシコで同じような活動をしている者の支援があったわけです。私はその件に関して、エルサルバドルのクリスティアニ大統領とも話し合いました。

この出来事は三週間から一か月前に起こったわけですが、幸いなことにサンサルバドルの問題は解決しつつあります。使われなかったミサイルはニカラグアに返還する、という話し合いができております。

サンサルバドルの反乱者達は今内戦あるいは戦いに疲れています。疲弊しています。「もうたくさんだ」という気持ちなのだと思えます。私どもとしても、私の指揮下にある軍隊、すなわちミサイルを引き渡した軍人達を制裁しました。

日本の友人達にぜひ聞いて欲しいことがあります。私はミサイルのみならず、すべての武器に対して徹底的に反対します。私はすべての武器の敵である、ということができると

思います。そして、今は戦争の遺産である武器をいかにして元の国に返すかということに、非常に苦心しております。

今後、ソビエトと会議が開かれるでしょう。その場において私どもは、ソビエトから手に入れたミサイルを返還する交渉をしたい、と思います。私どもは、戦争を促進する武器は、いかなるものもわが国にとどまることを好みません。またわが国から武器が出ることによって、隣国の平和を脅かし、戦争状態をさらに促進するようなことはもってのほかだ、と思っております。

正直に申し上げますけれども、わが国にはミサイルも戦車もヘリコプターもあります。これらはソ連並びにドイツからもたらされたものです。ソビエトとは返還の交渉をいたします。ドイツに対しても、武器についての話し合いを行い、速やかにわが国からすべての武器がなくなることを願っております。

平井（毎日） 現在、ニカラグアが直面している深刻な経済問題についてですけれども、インフレ率は高く、多額の対外債務を持ち、そして成長率は非常に低いわけです。こういった問題の解決をどのようにするのか、具体的にお聞きしたい。

ラカヨ大統領府大臣 この問題については、

私から答えます。私どもが何を行っているかということですが、現在、経済の安定化プログラム、構造調整計画というものを策定している最中です。インフレ率を下げるということが非常に重要な骨子です。それとともに公的な支出を削減することによって、財政赤字を抑えたいわけです。

現在までに非常に大幅な財政赤字は減ってきており、実質的にはゼロに近い状態までできております。また、ここ数か月の間に外国からの新規の融資が得られます。主としてアメリカからですが、これによって財政も立て直しが図られると思います。

並行して、私どもは対外債務のリスク交渉その他を行っております。ベネズエラあるいはメキシコといったニカラグアへの石油供給国については、具体的な合意を得ている状態にあります。

今後、その他の再建、チェコスロバキア、ソ連、イランとも交渉しますし、パリクラブのメンバーとの交渉もこれから始まるところです。

私どもは、現在策定している経済安定計画、構造調整計画が効果を持つことを信じております。また外国の支援並びにニカラグア国内の民間部門の活性化によって、成長率が高まることを期待しております。

私どもの政府の方向性ですが、それは自由で開放された経済市場を目指すことです。そのためには社会的な公正さが重要です。その基盤にのっとった自由で開放的な経済を推進し、民間のダイナミズムに期待するということです。外国からの投資並びにニカラグア国内の企業の積極的な発展への努力が期待されます。

同時に外国からの投資を目指す企業の代表団も誘致したいと思っております。日本からも企業のメンバーを代表とする代表団が、ニカラグアを訪問することが決まっております。

チャモロ 最後にご集まりの皆さま方に感謝したいと思います。この会見で、皆さま方がわが国に対して持っていた疑問が氷解することを期待しております。私はわが国から遠い日本の方々と、このように近くでお会いすることを希望しておりました。その夢がかなったことを非常に喜んでおります。今日はどうも本当にご清聴ありがとうございました。

(通訳 丸山啓子 文責 編集部)

ピオレタ・バリオス・デ・チャモロ氏 一九二九年、ニカラグア南部のリバス県生まれ。四七年、米国バージニア州ブラックストン・

カレッジ卒。五〇年、「ラ・プレッサ」紙社主のペドロ・ホアキン・チャモロ氏と結婚。

ご主人のペドロ・ホアキン氏は、反ソモサ大統領運動の論客で、その論調は国民的支持を得ていたが、七八年一月暗殺され、その後、チャモロ夫人が社主として「ラ・プレッサ」紙の経営を引き継いだ。

七九年七月、ニカラグア革命を終えた、サンディニスタ民族解放戦線(FSLN)の要請にこたえ、国家再建執政委員会の委員に就任したが、その後サンディニスタの左傾化に反対し、八〇年四月、同委員を辞任。

以後、サンディニスタ政権は「ラ・プレッサ」紙に対し、頻繁に検閲、発行停止などの妨害を加えたが、チャモロ夫人は弾圧に屈することなく、反サンディニスタの論陣を張った。

反サンディニスタのイデオロギーを共有する十四の政党で構成する「国民野党連合」(UNO)からの出馬要請を受け、八九年九月、大統領候補の指名を受諾したチャモロ夫人は、九〇年二月、サンディニスタ優勢との前評判を覆して大統領選挙に圧勝、同年四月ニカラグア大統領に就任した。

